

分析からの建築用途と設計手法

1・建築用途

規模の違う用途のものを2つ設計する事で、仕舞の動きがどのように作用し、変化するかを考えた。

① 住宅 ② 美術館に異なる動線が示される住宅を設計することで、異なる動線が示される

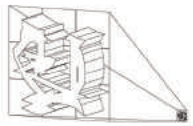
③ 美術館 住宅とは異なる動線が多くなる動線が示された、多くの人が異なる動線が示される。そして、美術館では異なる動線が示される住宅を設計することで、異なる動線が示される

1・傾にする

人のスケールから傾にし、そのスケールにあった機能を入れていく。
2.5倍は住宅、10倍は美術館とした。

② 10倍 60000×60000

① 2.5倍 15000×15000



2・アウトラインだけ取り出す

形の簡易化をするため屋根のアウトラインを取り出して平面する。

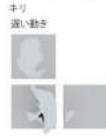


形が3パターンできる。



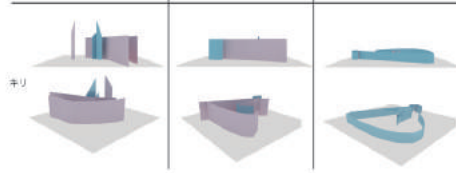
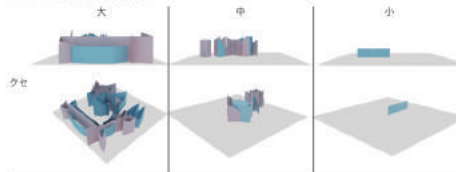
3・動きの速さ選定

アウトラインに高さを与えたキリ、クセを「はたつきながら手の動作が速い部分」「移動方向で多く、手の動作がない部分」をそれぞれ画し、速い動きに合わせた形
クセ
速い動き



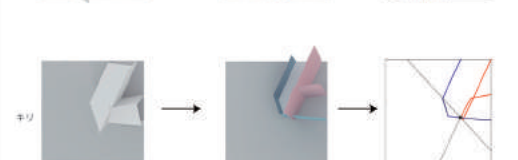
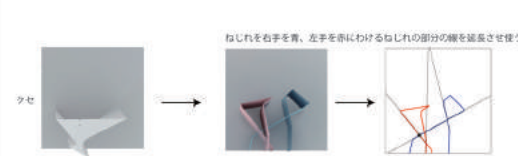
4・天井の高さ

キリ、クセの移動動でできた形の手の高さや「大・中・小」でわけたそれぞれの形
クセとキリ自体はクセの方が高い。



5・おしれ

壁の方向転換でできたおしれを取り出す。



住宅と美術館への応用

住宅

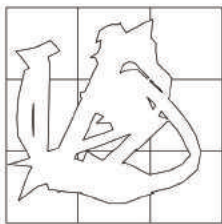
1・クセとキリを繋ぐ。アウトラインをとりだす



2・アウトラインを立体に起こす



3・ネガとボジをつくる



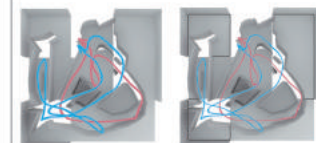
4・ネガとボジを9つにわけ



5・ネガ、ボジ9つつつを組み合わせて形を作っていく



舞の順番で玄関から部屋までを決定する
速く動く部分→廊下 遅く動く部分→部屋



・高さの高いクセと低いキリでフロアが決まる
・クセとキリを重ねることでゴゴコになる空間が増える



・おしれで部屋を区切る



美術館

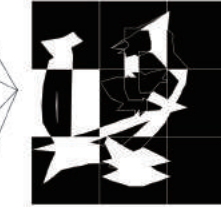
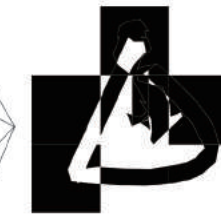
1・アウトラインをとりだす



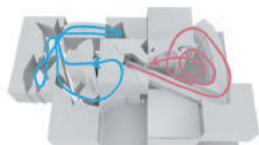
2・アウトラインを立体に起こす



3・ネガ、ボジをつくる



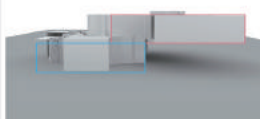
・クセ、キリそれぞれの舞の順番で進んでいく



・速く動く部分→廊下 遅く動く部分→部屋



・2つの舞の開始部分を重ねる
平面では前半のクセとは対照的な後半のキリを反転させ配置する。
立体では、平面から起こった反転を再度用いて、重なりあがるキリを上、差し込みであるクセを下にして配置。
クセは具体的に高いが、美術館の敷地の中でキリが反転しているためキリとクセの高さを反転した。



・おしれで部屋を区切る



